



薬学部だより

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokushima University

薬学部

徳島大学薬学部
July 2017

Vol.20

新学部長からのメッセージ



徳島大学薬学部長

佐野 茂樹

Shigeki Sano

平成29年4月1日より、大高章前学部長の後任として薬学部長を拝命いたしました。甚だ微力ではございますが、薬学部長ならびに大学院薬科学教育部長、医歯薬学研究部副研究部長（薬学域）として、徳島大学薬学部のさらなる発展のために一意専心努めてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

薬学部では本年度も83名の新生を迎えることができました。入学試験の難関を見事乗り越えて徳島大学薬学部の一員となられたみなさんには、学部を代表して心からのお祝いと歓迎の意を表したいと思います。みなさんの抱いている夢や希望、思いや志が叶うよう、何事にも感謝の気持ちを忘れることなく、確固たる目的意識をもつ

て、充実したキャンパスライフを過ごしてください。教職員一同、みなさんが大きく飛躍されることを心より願っています。

さて、平成18年度より施行された改正学校教育法によって、薬剤師養成のための薬学教育は学部の修業年限が4年から6年へと延長されました。それに伴い、徳島大学薬学部では6年制学科（薬学科・定員40名）と4年制学科（創製薬科学科・定員40名）を併設した新しい教育制度がスタートしました。具体的には、入学者選抜において両学科一括での募集を行い、学部3年次前期までは共通のカリキュラムで薬学の基礎を学び、各自に適した進路選択が可能となるよう3年次後期から各学科ならびに各研究室に配属されるという教育プログラムが組まれています。以来、およそ一世紀におよぶ歴史と伝統に培われた創薬志向の精神と、医療系3学部（医学部、歯学部、薬学部）ならびに病院施設、先端酵素学研究所が集中する稀有な立地環境を活かし、特色ある薬学教育を実践しています。すなわち、薬学が関係する諸分野の連携を基盤に、自らの活躍の場を積極的に開拓できる能力に溢れた人材「インタラクティブ

YAKUGAKUJIN」の育成を教育方針の柱として掲げ、多様な薬学関連領域にあつて次世代を担う人材の育成に取り組んでいます。今春入学されたみなさんは、薬学部6年制がスタートしてから12年目の同期入学生です。そして、13年目となる平成30年度の入学者選抜からは、これまでの両学科一括での募集を学科別募集へと変更し、各学科の教育目標とカリキュラムの特色をより鮮明にすることで、「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」養成のさらなる加速化ならびに高度化を目指します。

徳島大学薬学部は立ち止まることなく、新しい時代を見据えた挑戦を続けています。今後ともなお一層のご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



入学者選抜

■平成30年度 徳島大学薬学部入学者選抜における変更事項

薬学部入学試験委員長
薬物動態制御学分野 教授

石田 竜弘

Tatsuhiko Ishida

平成18年度より薬学部6年制が開始され、本学部ではあまたの議論を経て、入学者選抜方法として学科を分けず一括募集・一括入学、3年次後期で学科配属することを選択しました。薬学科・創製薬科学科それぞれ40名の定員があるため、一部の学生さんには必ずしも志望に叶わない学科配属もありましたが、入学後も多くの学生さんが学修に対して高いモチベーションを維持するなど、負の側面ばかりではなかったと考えています。

これまで、創製薬科学科（4年制）卒業生には、実務実習等の必要単位を取得し、個別に厚生労働大臣に申請し認められれば薬剤師国家試験の受験資格が付与されるという特例措置がありました。しかし、平成30年度入学

生より、この措置がなくなります。このことを受けて本学部では、これまでの一括募集を廃止し、学科毎の募集を行うことになりました。したがって、平成30年度入学生からは薬学科（6年制、薬剤師国家試験受験資格付与）と創製薬科学科（4年制）とが入学時点で明確に分かれることになりました。

さらに、大きな変更事項としましては、これまでの推薦入試を廃止しAO入試を導入（薬学科8名、創製薬科学科5名）する点です。本学部で策定したアドミッション・ポリシーに基づき、志望動機書・活動報告書、論述レポート及び個人面接、最終的に大学入試センター試験の成績を総合して合否を判定します。グローバルな視点を持ち、社会に貢献する意欲に満ちた学生さんに受験をしてもらい、自ら活躍できる場を積極的に開拓できる可能性をもった学生さんに入学してもらいたいと考えています。また、薬学科ではこれま

で行っていた一般入試（後期日程）を廃止し、AO入試と一般入試（前期日程）（32名）のみでの募集に変更すると同時に前期試験で集団面接を課すことにしました。徳島大学薬学部で学びたいと強い意志を持つ学生さんが前期日程試験の受験者に多いこと、また、薬学科では病院・薬局での実務実習が卒業要件として課せられるなど高いコミュニケーション能力が問われることがその理由です。

これまで一括入学で3年次に学科分けを行っていたため、低学年での講義では広く薬学を講義すれば十分でしたが、今後はそもそも志望の異なる2つの学科を対象に講義を行っていく必要があります。今回の入学者選抜制度の変更は、徳島大学薬学部を志望する学生さんだけでなく、入学生を受け入れる教員にとっても大きなパラダイムシフトであり、現在、各学科の特色を明確に打ち出したカリキュラムの策定を進めています。

① 一般入試（前期日程）（後期日程）

学科	薬 学 科	創製薬科学科
	薬学科は一般入試（後期日程）を廃止する。よって、一般入試（前期日程：募集人員32名）のみで実施する。一般入試では集団面接を課す。	創製薬科学科は一般入試（前期日程：募集人員20名）（後期日程：募集人員15名）を実施する。

② アドミッション・オフィス入試（AO入試）の新規実施（大学入試センター試験を課す）

学科	薬 学 科	創製薬科学科
	アドミッション・オフィス入試（AO入試）を新規で実施する（募集人員8名）。	アドミッション・オフィス入試（AO入試）を新規で実施する（募集人員5名）。

研究紹介

■ 近未来型の創薬研究 - 核酸はクスリになるか? -



生物有機化学分野 教授

南川 典昭

Noriaki Minakawa

はじめに

私たちが健康な日常生活を過ごすためには、時として薬の力が必要になります。今、私たちの国では約18,000品目の医薬品が使われていますが、そのほとんどが低分子有機化合物であり、またそれら医薬品の作用点の殆どがセントラルドグマ (DNA → RNA → タンパク質) における最終表現系のタンパク質です。私たちの研究室では、これまでの創薬概念とは異なるアプローチで近未来型の創薬研究を行っています。それが「核酸創薬」です。

核酸創薬とは?

DNA や RNA は僅か4種類の核酸塩基 (A, G, C, T (RNA の場合は T が U)) が一列に並んだ生体高分子です。ただこの並びがとても重要で、人によって、また健常人と病気の人によって並びが僅かに違ってきます。核酸創薬とは、この僅かな違いを識別して悪い遺伝子だけをブロックあるいは分解する手法で、それを DNA や RNA と同じ核酸分子によって行おうとするものです。図1にその概念図を示しましたが、例えばアンチセンス分子や siRNA (図中央) は、mRNA を分解することで病因タンパク質の翻訳を阻害

します。

有機化学的アプローチからの核酸創薬研究

DNA では A は T と、G は C と必ずマッチするという特異性があります。図1に示した核酸創薬の概念は、基本的にはこの特異性を利用しており、病気の原因となる遺伝子配列だけにぴたりマッチする (相補的な) 核酸分子を作れば良いわけです。原理は非常にシンプルで、これがうまくいけばすべての病気に適応できると思われれます。ただ天然型の核酸分子は非常に不安定な物質です。つまり、クスリとして投与しても体の中であつという間に分解されてしまいます。そこで私たちが行っているのが、有機化学の力で人工的な核酸分子 (疑似核酸) を合成し、それを医薬品として開発するための基礎研究です。一例として DNA や RNA の糖部環内の酸素原子を硫黄原子に置換した 4'-チオ核酸を開発しました (図2)。天然型核酸分子と比較して、酸素原子が硫黄原子に置き換わった非常にシンプルな化学修飾ですが、この僅かな違いによって分子の安定性が600倍以上も向上しました。また標的となる遺伝子により強く結合できることが明らかになり、この人工核酸を

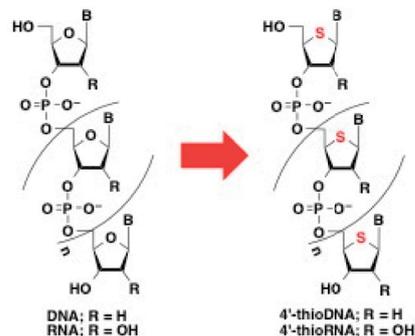


図2 天然型核酸と4'-チオ核酸の構造

組み込んだ siRNA は、活性ならびに持続性の点でこれまで知られているものよりも優れており、核酸創薬の有用な候補分子であることが明らかになってきています。加えてこの4'-チオ核酸は、天然型の核酸と“生物学的等価性”を有しており人工遺伝子として機能する可能性が見出され、新たな研究展開が期待されています。

おわりに

学生時代を含めると私が薬学部を置いて、30年以上になります。「貴方は何の研究をしているのですか?」と尋ねられると、「有機化学を基盤とした創薬化学研究です」と、一貫して答えてきました。言い換えると、創薬につながる研究で面白そうであればなんでも良い! という気持ちで研究を行っています。今、徳大薬学生の活躍

でその研究の裾野が広がっています。是非、彼らの成果を生物有機化学研究室のHPでご覧いただければ幸いです。

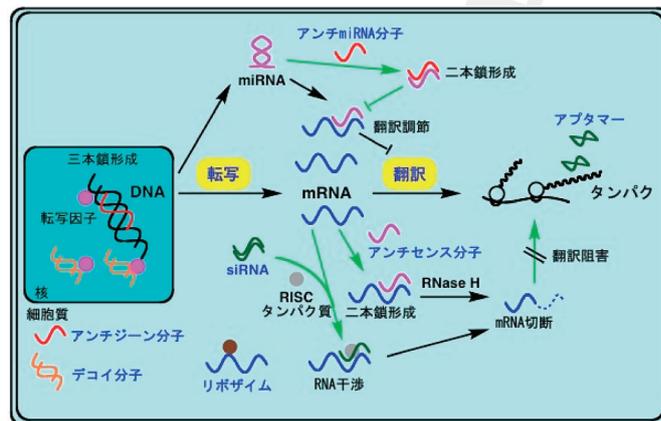


図1 核酸創薬の概念図

新任教員紹介



衛生薬学分野 助教

福田 達也

Tatsuya Fukuta

平成29年4月1日付けで、衛生薬学分野（小暮健太郎教授）の助教に着任いたしました福田達也（ふくた たつや）と申します。

私は平成19年に静岡県立大学薬学部に入學、平成21年より薬学部6年制課程に進み、平成25年に薬剤師免許取得、卒業いたしました。その後、同大学大学院薬学研究科博士課程（4年制）へ進学し、学部次に引き続いて医薬生命化学教室（奥直人教授）に所属しておりました。その間、ドラッグデリバリーシステム（DDS）であるリポソームを用いた疾患治療研究、特に脳梗塞治療法の開発に関する研究に従事し、平成29年3月に学位 博士（薬学）を取得、現在に至ります。

これまで徳島の地には学会で一度訪れたことがあるのみでしたが、学生時代に築かせて頂いた人脈、それによるご縁があり、本学薬学部衛生薬学分野の助教として研究者のキャリアをスタートさせて頂く運び

となりました。10年間過ごしてきた静岡、そして地元である秋田に似た穏やかな雰囲気徳島にはあり、生活、研究をする上での心地良さを日々感じております。本学では、自身が薬学部6年制・大学院博士4年制課程で得てきた経験、また学生の立場から4・6年制の薬学部生を身近で見てきた経験を生かし、大学生活という貴重な期間に学生自身ももっと学びたい、研究をしたいと意欲的に生活できるような環境を築いていきたいと考えております。

まだまだ未熟ではございますが、徳島大学薬学部の一員として研究および教育に励み、学生の成長の力添えができるよう精進したいと考えております。微力ではございますが、本学の発展に少しでも貢献できるよう尽力する所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



分子情報薬理学分野 助教

福島 圭穰

Keijo Fukushima

平成29年4月1日付けで、医歯薬学研究科分子情報薬理学分野の助教として着任いたしました福島圭穰（ふくしま けいじょう）と申します。この度、責任ある立場に就任することとなり、今まで以上に邁進しなければと気を引き締めている次第です。

私の生まれは熊本県で、幼少期は兵庫県神戸市で過ごしました。平成21年に静岡県立大学薬学部薬学科を卒業後、平成26年に同大学大学院薬学研究科生化学分野にて博士（薬学）を取得しました。学位取得後は、名古屋大学医学部附属病院にて薬剤師として2年間勤務しておりました。

学位を取得した静岡県立大学では、呼吸器系ウイルスが糖鎖受容体を認識するメカニズムを研究しておりました。名古屋大学医学部附属病院に移った後は、臨床業務に携わるとともに、医療ビッグデータを用いたデータマイニング研究を行ってきました。本学分子情報薬理学分野においては、これまでに培った自分の強みを活かすとともに、新しい分野にも柔軟に挑戦し、本研究の命題である薬物受容体の情報伝達調

節機構を解明すべく研究に打ち込む所存です。

また教育活動においては、皆様に信頼される教員を目指す一方で、基礎研究と臨床業務の両方を経験してきた者として、薬学出身者ならではの強みを模索していきたいと思っております。基礎と臨床の両方を見渡せる薬学は、とても裾野の広い学問です。臨床に強い医学部や基礎研究に強い理工学部とは異なる、薬学部出身者ならではの社会貢献の方法を共に考え、新しい道を開拓して行ける人材を育てていきたいと思っております。今後とも、皆様方からのご指導とご鞭撻をどうぞ宜しくお願いいたします。



新任教員紹介



薬品製造化学分野 助教

猪熊 翼

Tsubasa Inokuma

平成29年4月1日付で、薬品製造化学分野（山田健一教授）助教に着任いたしました猪熊翼と申します。私は平成17年に京都大学薬学部総合薬学科を卒業後、同大学大学院薬学研究科に進学し、竹本佳司教授のご指導の下博士の学位を取得しました。その後、上原生命記念財団のご支援を賜り海外に留学する機会を得ましたので、米国スクリプス研究所 Carlos F. Barbas III 教授研究室にて博士研究員を1年半経験し、帰国とともに、徳島大学薬学部総合薬学研究推進学特任助教として採用され3年半の勤務の後、現所属に至っております。私はこれまでの所属研究室でそれぞれ、小分子化合物、高分子タンパク質及び中分子ペプチドを基質とした有機合成研究に取り組んで参りました。現所属研究室では、私の原点であります小分子化合物の反応開発

に再び軸足を戻しながらも、これまで渡り歩いてきた研究室で培った技術を取り入れた新規反応開発を行うことで創薬化学の更なる進歩に貢献すべく日夜切磋琢磨しております。

また、私は昨年度まで『創薬実践道場構築事業』における仮想企業による新薬開発プロジェクト演習を担当しておりました。これから本学薬学部は学科分割入試を行いますが、それに伴い創薬人育成カリキュラムの更なる充実が求められるかと思えます。私は、これまでの事業展開で得た知見・経験を基に我々に課せられたこの重要なミッションに取り組むつもりです。

まだまだ至らぬ点もございますが研究・教育ともに全力を尽くす所存でありますので、何卒ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

クラウドファンディング

■ 徳島大学 / academist 学術系クラウドファンディングを実施して — 遺伝子組換えカイコによるリソソーム病治療薬開発へのチャレンジ —



創薬生命工学分野 教授

伊藤 孝司

Koji Ito

徳島大学では、野地澄晴学長のご指導の下、2016年10月より一般社団法人大学支援機構 (Organization For People With Universities) が発足し、OTSUCLE (おつくる) クラウドファンディング (CF) サイトが順調に運営されています。私達、創薬生命工学分野では、その前段階として学術系 CF サイト academist を介して、「組み換えカイコでリソソーム病の治

療薬を作りたい！」のプロジェクト内容で、資金募集期間（2016年8月25日～10月25日）・目標金額（100万円）でCFに挑戦しました。幸いにして、期間内に募金総額122万円を獲得することができました。学内からもご支援いただき、お礼申し上げます。

リソソーム病は、生体分子の分解代謝に関わるリソソーム酵素の遺伝的欠損に基づき、患者臓器内での基質の過剰蓄積と多様な症状が現れる先天性代謝異常症です。希少疾患ではありますが、40種ほど存在し、厚生労働省では特定疾患「難病」に指定されています。近年、哺乳動物培養細胞株で製造する組換えヒトリソソーム酵素製剤を、患者静脈内に投与する酵素補充療法が実用化され、国内では8種の疾患に対し9種類の治療薬が臨床応用されています。しかし患者1人の治療に年間3,000万円以上の高額な医療費がかかるため、より低コストで安全な治療薬の開発が望まれています。

私達は、大量の絹糸を吐き出して繭を作るカイコの優れたタンパク質生成能力に着目し、農研機構・カイコ機能改変技術開発ユニットとの共同で、ヒトリソソーム酵素遺伝子を絹糸腺で高発現する組換えカイコを作製し、本CFで獲得した研究費を用い、繭から簡便にヒト酵素を精製する方法を確立しました。また欠損症モデル細胞やマウス等に投与し、その有効性を明らかにしました。さらにその研究成果を、本年2月に開催された World Symposium 2017 (San Diego, USA) や3月末の日本薬学会第137回年会・一般シンポジウム等で発表しました。本CFの実施に際し、SNSを通じて「日本ムコ多糖症患者家族の会」や国内製薬企業の方々とのネットワークも広がりました。今後は、本CFで得られた成果を基盤に、製薬・ベンチャー企業との共同研究や外部資金の獲得につなげたいと考えています。

国際交流

■ 広西植物研究所（中国）との学術交流



生薬学分野 教授

柏田 良樹

Yoshiki Kashiwada

広西植物研究所は、中国南部のチワン族自治区に1935年に開設された研究所で、中国科学院が共同運営する研究組織の一つです。本研究所は、6つの研究センターから構成されており、所属する研究者と大学院生が広西省の豊富な天然資源や栽培果樹の機能性等の研究に従事しています。

また、併設される桂林植物園は本省に特有な石灰岩植物700余種を含む約8,000種の植物を保存栽培しています。

広西植物研究所創立80周年記念シンポジウムが2015年に開催され、柏田が招待され講演を行ったことが契機となり、副所長の李教授（現 所長）と共同研究に関する打合せを開始しました。昨年、柏田と生薬学分野の田中直伸准教授が招待され、研究所で講演を行うとともに、桂林市周辺における植物資源の調査を実施しました。また、広西植物研究所から李教授を含む3名が徳島大学薬学部を訪れた際に、先方から協定を交わしたいとの要望があり、本年1月に学術交流協定を締結いたし

ました。本年4月には、広西植物研究所で修士課程を修了した研究者が大学院博士後期課程に入学し、生薬学分野で研究を開始しています。

広西省の南寧市では毎年端午の節句時に大規模な薬草市が開催されることから、本年もその時期に訪問する予定にしており、今後さらに交流を継続していきたいと考えています。



桂林植物園にて（左から田中准教授、李教授、柏田）

■ 東國大学校との交流について



医薬品機能生化学分野 教授



医薬品情報学分野 准教授

土屋浩一郎 佐藤陽一

Koichiro Tsuchiya Yoichi Sato

平成28年8月には、本学部と学部間協定を結んでいる大韓民国の東國大学校薬学部から Prof. Kyeong Lee と Prof. Moo-Yeol Lee の2名の教授を本学部にお招きし、講演会を開催いたしました。今回、平成28

年12月14日～16日の日程で、医薬品機能生化学の土屋と医薬品情報学の佐藤が訪問しました。東國大学校は Wikipedia によると仏教系私立大学と書かれていたのでそういう雰囲気期待して訪れたのですが、薬学部のキャンパスはごく普通の佇まいでした。

2日目の夕方に講演会を開いていただき、土屋が「Dietary nitrite and its bioregulatory functions」、佐藤が「Disease-related and drug-responsive genes」という演題で発表を行い、活発な意見交換を持つことができました。また、この講演の前に韓国と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の軍事境界線（休戦ライン）に面した非武装地帯（DMZ）を望むツアーに参加して、日本の日常とは異なる雰囲気にも

触れることができ、貴重な経験となりました。

今回訪問した3日間は、天気は快晴でしたが最高気温が0度、最低気温が-10度と、韓国でも平均を下回るという寒い3日間でしたが、“Hot”な交流を持つことができたと思っています。この交流は相互に実施する事になっており、次回は平成29年6月に東國大学校薬学部から2名の教員を招き、講演会を開催する予定です。最後に、本学部との交流に尽力していただいている東國大学校薬学部の千文字先生（Prof. Moon-Woo Chun）に深謝申し上げます。



学生の活躍

ヨーロッパヒスタミン学会に参加して



分子情報薬理学分野
大学院薬科学教育部博士後期課程1年

湧川 朝治

Tomoharu Wakugawa

2016年5月11日から14日の4日間、イタリアのフィレンツェで開催された45th ANNUAL MEETING OF THE EUROPEAN HISTAMINE RESEARCH SOCIETYに参加させていただきました。この学会はヨーロッパだけでなく、世界中の研究者が参加し、内容も基礎研究から医薬品の臨床試験まで幅広い学会でした。この学会で私は、英語による口頭発表をさせて

いただきました。私自身、初めての海外ということもあり、発表準備の時から英語で伝えることの難しさを感じましたが、先生方のご指導や研究室の皆様のおかげで発表することができました。私のつたない英語でしたが、内容を伝えることができ、貴重な経験となりました。

この学会は8:30~22:00頃までプログラムがあり、初日はウェルカム・カクテルに始まり、最終日は宮殿での晩餐会という賑やかな学会でした。有意義な4日間の締めくくりとして、私は晩餐会で若手研究者の方々とヒスタミンの歌（28番まである、polly wolly doodle のメロディーにのせて）を皆の前で歌うというユニークな経験させていただきました。参加者が朝から晩まで元気で驚くとともに、研究者でも体が資本であることを学びました。

今回、学会が開催されたフィレンツェはイタリア中部の都市でルネッサンス発祥の地であり、世界最古の薬局であるサンタマリアノヴェツラ薬局

（1612年創業）があります。学会では、名所を見学するプログラムもあり、芸術や歴史に触れる機会にも恵まれました。

学会に参加することで研究の最先端や流行を肌で感じ、他大学の先生や企業の方と交流することができ、今後の学生生活での励みとなりました。最後になりますが、貴重な発表の機会を与えてくださいました藤野裕道教授、水口博之准教授に厚く感謝いたします。



学会会場にて



薬学部4年 薬学部サッカー一部

大川内 健人

Kento Okawauchi

私たち薬学部サッカー一部は、1年生15人、2年生14人、3年生11人の計40人で活動しており、初心者から経験者まで所属しています。活動内容としては週1回の練習、また月

1回程度フットサルを行っています。毎年10月には蔵本杯という大会が開催されており、私たちはこの大会で優勝することを目標とし練習に励んでいます。一昨年行われた蔵本杯では優勝を果たしました。もちろんサッカーだけではなく、新歓・追いコン・BBQ・阿波踊りなど、積極的に様々なイベントを行っており、選手やマネージャーを問わず楽しく活動しています。

私は高校生のときサッカー部に所属していましたが、大学でサッカーを続けるかどうか迷っていました。そんな時、先輩から勧誘されたことがきっかけで、サッカー部に入部することを決めました。サッカー部では部員が多いという利点を生かして沢山の友人を作ることができ、またサッカー部は先輩

との繋がりが強いので、様々なアドバイスをしてくれる先輩を持つことができました。サッカー部に入らなければこのような人との繋がりが出来なかったため、今ではサッカー部に入部して良かったと感じています。私はキャプテンを務めていましたが、キャプテンとしての仕事は慣れていないということもありとても大変でした。しかし、それ以上にやりがいを感じる事ができ、今は貴重な経験ができて良かったと思っています。

大学生活において専門分野の勉強に取り組むことはもちろん大切です。ですがそれだけではなく、部活動にも取り組むことで様々な人と出会い、視野を広げることも将来の自分にとって大切であると私は考えています。

サークル紹介

薬学部関連ニュース

教員の異動

平成29年3月31日付退職

臨床薬学実務教育学分野 川添 和義 教授
臨床薬学実務教育学分野 岡田 直人 助教

平成29年4月1日付採用

衛生薬学分野 福田 達也 助教
分子情報薬理学分野 福島 圭穂 助教
薬品製造化学分野 猪熊 翼 助教

平成29年5月1日付採用

臨床薬学実務教育学分野 久米 哲也 教授

学会賞等受賞

【教員の受賞】(所属分野は受賞時)

■平成28年度日本薬学会中国四国支部奨励賞

受賞者: 中尾 允泰 助教(分子創薬化学分野)
受賞年月日: 平成28年11月5日
表彰団体名: 日本薬学会中国四国支部
受賞内容: シケトピペラジンの分子構造特性を基盤とする機能性分子の創製

■一般ポスター賞

受賞者: 竹内 政樹 准教授(分析科学分野)
受賞年月日: 平成28年12月2日
表彰団体名: 日本分析化学会イオンクロマトグラフィー研究懇談会
受賞内容: 徳島市における水溶性酸性ガス及びPM2.5に含まれる陰イオンの高時間分解観測

■塩野義製薬研究企画賞

受賞者: 猪熊 翼 特任助教(総合薬学研究推進学分野)
受賞年月日: 平成29年2月16日
表彰団体名: 有機合成化学協会
受賞内容: ペプチドへの直接的な不斉マンニツヒ反応を基盤とする新規効率的な中分子合成法の開発■Honorary Member of EHR
(欧州ヒスタミン学会名誉会員)受賞者: 福井 裕行 特任教授(分子難病学分野)
受賞年月日: 平成29年5月11日
表彰団体名: EHR(欧州ヒスタミン学会)
受賞内容: アレルギー疾患におけるヒスタミンシグナルの病理機構解明

【学生の受賞】(学年は受賞時)

■第32回若手化学者のための化学道場最優秀ポスター賞

- 受賞者: 中山 慎一郎 (M1)
受賞内容: TAK-1阻害剤LLZ-1640-2の不斉全合成
- 受賞者: 大橋 栄作 (M1)
受賞内容: Palau'amineの第二世代合成研究
受賞年月日: 平成28年8月26日
表彰団体名: 有機合成化学協会

■第53回ペプチド討論会ポスター賞

受賞者: 森崎 巧也 (D1)
受賞年月日: 平成28年10月27日
表彰団体名: 日本ペプチド学会
受賞内容: Development of N-sulfanylethylanilide (SEAlide)-based traceable linker for enrichment and selective labeling of target proteins

■平成28年度日本薬学会中国四国支部学生発表奨励賞

- 受賞者: 牛山 和輝 (B4)
受賞内容: (+)-Lapidilectine Bの全合成研究
- 受賞者: 佐藤 明穂 (B6)
受賞内容: 鉄欠乏が骨格筋に与える作用の検討
- 受賞者: 成瀬 公人 (M2)
受賞内容: マンノース6リン酸修飾型GM2活性化タンパク質の合成研究
- 受賞者: 栗飯原 圭佑 (D3)
受賞内容: ケミカルバイオロジー研究を指向した環状ペプチド trichamide の合成研究
受賞年月日: 平成29年1月21日
表彰団体名: 日本薬学会中国四国支部

■2016年「分析化学」若手初論文賞

受賞者: 富安 直弥 (B6)
受賞年月日: 平成29年2月8日
表彰団体名: 日本分析化学会「分析化学」編集委員会
受賞内容: 2015年冬季の徳島市における水溶性酸性ガス及びPM2.5に含まれる陰イオンのオンライン分析

■日本薬学会第137年回優秀発表賞(口頭発表の部)

受賞者: 渡邊 綾佑 (B4)
受賞年月日: 平成29年3月31日
表彰団体名: 日本薬学会第137年回
受賞内容: Tay-Sachs 病患者 iPS 細胞由来神経細胞を用いた分子病態解析と治療薬の開発

■JPS Travel Award

- 受賞者: 森崎 巧也 (D2)
受賞内容: Development of N-sulfanylethylanilide-based traceable linker for purification and selective labeling of target proteins
- 受賞者: 成瀬 公人 (D1)
受賞内容: Development of methodology for preparation of peptide thioester via on-resin N-S acyl transfer using N-sulfanylethylanilide peptide
受賞年月日: 平成29年5月22日
表彰団体名: 日本ペプチド学会

発行: 徳島大学
編集: 薬学部広報委員会
広報委員: 難波康祐、藤野裕道、植野 哲
佐藤陽一、阿部真治、北池秀次URL: <http://www.tokushima-u.ac.jp/ph/>
〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係
E-mail: isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、平成29年の12月頃を予定しております。